遺伝子検査のデータ集約と共有で世界のがんゲノム医療の先進国に

今や日本人の半分が発症し、死因の第1位ともなっているがんだが、一方で治療法の進歩で決して不治の病ではなくなり、早期発見によって完治するケースも増えている。そうした中、がんを「治る病気」にする為の切り札として期待を集めているのが、がんゲノム医療だ。ゲノム医療は、日本の研究で一部の肺がんの原因となる遺伝子が特定されて以来、日本が世界の研究をリードして来た。そうした一連の研究の先頭に立ち、日本独自のがん患者のデータベース作りで主導的役割を担ってきた国立がん研究センター研究所長の間野博行氏に、最新の研究成果やゲノム医療の今後について講演して頂いた。

間野 博行氏
国立研究開発法人 国立がん研究センター 研究所長

挨拶

原田 義昭氏「日本の医療の未来を考える会」最高顧問（元環境大臣、弁護士）

ゲノム医療に関しては日本が最先端を走っていると聞いていますので、今日は講演を楽しみにしています。政治の世界では、今、東京都知事選挙の真っ最中で、ポスター掲示板の在り方が議論されていますが、今後、改善が図られて行くと思います。注目されている選挙ですから、有権者の責任でしっかりとした都知事を選んで頂きたいと思います。

三ッ林 裕巳氏「日本の医療の未来を考える会」国会議員団代表（衆議院議員、元内閣府副大臣）

ゲノム医療については昨年6月、国民が良質で適切なゲノム医療を受けられる様、「ゲノム医療推進法」が議[illegible]勤委[illegible]て関わりました。政府の骨太方針にもゲノム医療が盛り込まれましたので、予算[illegible]た上で、国民が安心して恩恵を受けられる様、今後も十分な体制作りへの道筋を付けて行きたいと思っています。

続きを読むには購読が必要です
詳しくはホームページをご覧下さい